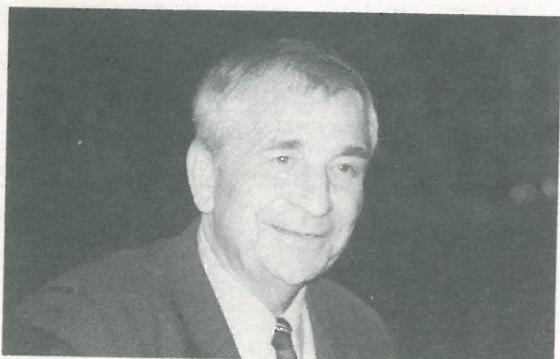


**死者は、私たちが彼らのことを見ている限り、**

**私たちとともに生き続けます・・・(19周年記念式典スピーチより)**

「**「チェルノブイリの消防士たち」代表 ポリス・チュマク**



1986年4月26日。この、ウクライナ国民の、ヨーロッパの、そしてアジアの歴史において、最も深刻な悲劇の一つを表す日付は、人びとの意識の中で、私たちの存在を「**「チェルノブイリ事故以前と以後」**に分ける、悲痛な境界線を引きました。

今日に至るまで、私たちは、この宿命的な爆発が今後の世代にもたらす影響を、完全には評価できず、その概略を把握す

ることすらできません。

わかっているのは、それが永遠に続くということだけです。

チェルノブイリで起こったこと、事故処理作業者たちが体験したことは、簡潔な数行の報告で尽くせるものではありません。彼らの心には、匂いも味も影もない、目に見えない敵との苛酷な闘いの記憶が、終生、残り続けることでしょう。

私たちは、チェルノブイリのことを新聞記事で読んで知っているわけではありません。自らの体で、心で、魂で、感じてきたのです。

当時、プリピヤチから住民を避難させ、建物や広場で放射性物質を洗い流し、原子炉の下から水を汲み出し、汚染地域で火災の消火作業をし、石棺用のコンクリートを作るため水を供給していたその時すでに、「私たちは、永遠にチェルノブイ

(次のページへ続く)

〒466-0822 名古屋市昭和区楽園町137 1-10

**「チェルノブイリ救援・中部」 代表代行：大谷早苗**

郵便振替：00880-7-108610

TEL/FAX：052-836-1073 (月・水・金 10:00~17:00)

E-mail : chqchubu@muc.biglobe.ne.jp

ホームページ : <http://www.chernobyl-chubu-jp.org>

リの人質である」ということはわかってきました。しかし、私たちはすべてをやりとげたのです。私たちが守っていたのは、国であり、家族や友人たちだったからです。

ジトーミルの消防士たちは、4号炉の下から水を汲み出す作業にもあたることになりました。そこでは、放射線のレヴェルは、数百レントゲンにも達していました。消火用その他のさまざまな物質を投入された原子炉が、破壊された冷却装置から放出された放射性の水をたたえた圧力調整プールに崩れ落ちていれば、水素爆発が起こり、半径300kmの圏内ですべてが死に絶えていたでしょう。私たちも、私たちの町ジトーミルも…。

ジトーミルの消防隊にふりかかった最も困難な試練は、1986年5月22日から23日にかけての夜、破壊された4号炉と稼動中だった3号炉をつなぐ、ケーブルの通路で起きた火災でした。

この火災については、長い間沈黙が守られていましたが、炎が3号炉にまで及んでいれば、いっそう恐るべき結果を招いていたかもしれません。

事故処理作業の結果は、ジトーミルの消防隊にも、その痕跡を残さずにはおきませんでした。事故処理作業に参加した289人のうち、41人は今日まで生きながらえることができませんでした。68人は障害者となり、現在まで職場に残っているのは22人にすぎません。

当時、彼らは22歳から24歳の若者で、恐ろしい敵である放射線との闘いに突入した時には、精力と希望にあふっていました。彼らはウクライナと世界の生命のために闘い、そして40歳になるかならないかで、勝利の高価な代償を支払い、この世を去っていったのです。

私たちの受けた傷は、永遠に癒えないものです。男は泣かない、悲しむだけだ…と言いますが、制御することのできない原子の力に、直にぶつかっていった者た

ちの目に、どれほどの悲哀がたたえられていることでしょうか。見てください。彼らは、皆さんの傍らに立っているのです。彼らの目を、心の中を見つめてください。

彼らの心は、亡くなつていった仲間たちへの思いであふれ、あの地獄を見てもいないので、彼らの名誉と尊厳をおとしめる輩がいることを思って、燃えるような痛みを感じています。そういう連中は、1986年の4月から5月、放射性物質が撒き散らされ、焼けつくような陽射しの降りそそいでいた、あの Chernobyl 原発の敷地にはいなかつたのです。

Chernobyl 被災者の社会保障に関する法律は、実質上機能していません。そして、Chernobyl 問題に関する最高会議での公聴会が、ほとんど無人の状態で行われているのを見るのは、腹立たしいことでした。事故処理作業者たちは、自らの病気と不幸とともに取り残されています。そして、彼らの幸福を願い、彼らの問題を減らそうとできるだけのことをしてくれる人々がまだいることに対し、神に感謝しています。

Chernobyl 被災者を代表して、亡くなつた者たちの家族や障害者に相応の支援をしてくださった企業や市民の方々に深く感謝し、常に心のこもった支援をしてくださっている日本国民の方々に、お礼を申し上げたいと思います。

#### 親愛なる同僚と友人の皆さん！

ウクライナ国民の一人一人が、自分がこの地上に存在し、けがれのない空と太陽を仰げることを誰に感謝すべきか、永遠に記憶し続けることを望みたいと思います。

死者は、私たちが彼らのことを覚えている限り、私たちとともに生き続けます。たとえそれが、つらいものであろうと、歴史がなければ、過去がなければ、未来もまた存在し得ないのです。そのことを、覚えておこうではありませんか…。

## 2006年 春 スタディ・ツアーエ企画(案)固まる!

現地の様子を知るには、何よりも  
「スタディ・ツアーエ」に参加すること!  
自分の五感で確かめるのが一番!

20世紀最悪の災害と言われる、「チェルノブイリ原発事故」。放出された放射能により被曝した人々が、21世紀になった現在も、後遺症や貧困・

差別などで苦しんでいます。事故当時、消火活動や除染作業に当たった人々(事故処理作業者)、汚染地から移住を余儀なくされた人々(移住者)、本来は移住するべきだったのに法律改正により取り残されている人々(汚染地域住民)、そして現地で支援活動を続ける仲間たち…。彼らを訪ねて握手をし、挨拶を交わして、楽しいひと時を過ごしませんか?また、彼らの豊かな大地には、私たちが忘れかけている美しい自然があります。そして首都キエフには、ユネスコ世界遺産が2ヶ所も…。

さあ!ウクライナへ旅立ちましょう。「チェルノブイリ20周年記念式典」に参加してメッセージを贈ったり、「日本&ウクライナ市民交流会」の開催等も企画中です。



<第3回スタディ・ツアーエのひとコマ>

**日程: 2006年4月22日(土)~5月3日(水) 12日間**  
**費用: おとな1人 約21万円(過去3回の実績より)**  
**募集人員: 約20名(先着順)**

	月/日(曜)	ツアースケジュール
1	4/22(土)	中部国際空港(セントレア)発⇒ドイツ/フランクフルト空港着 着後ホテルへ <フランクフルト泊>
2	4/23(日)	ドイツ/フランクフルト空港発⇒キエフ/ボーリスピリ空港 着 着後ホテルへ <キエフ泊>
3	4/24(月)	キエフ市内「チェルノブイリ博物館」見学 バスでジトーミル市へ移動 着後サトリムへ <ジトーミル泊>
4	4/25(火)	ジトーミル市内観光 <ジトーミル泊>
5	4/26(水)	「チェルノブイリ20周年記念式典」に参加 <ジトーミル泊>
6	4/27(木)	救援・中部の「支援施設訪問(ナロジチ地区)」 <ジトーミル泊>
7	4/28(金)	救援・中部の「支援施設訪問(市内の医療機関)」 <ジトーミル泊>
8	4/29(土)	「日本&ウクライナ市民交流会」…企画検討中 <ジトーミル泊>
9	4/30(日)	バスでキエフへ移動 キエフ市内観光「ユネスコ世界遺産」など 着後ホテルへ <キエフ泊>
10	5/1(月)	キエフ/ボーリスピリ空港発⇒ドイツ/フランクフルト空港着 着後ホテルへ <フランクフルト泊>
11	5/2(火)	ドイツ/フランクフルト空港 発⇒ <機中泊>
12	5/3(水)	中部国際空港(セントレア)着 解散

## 「救援・中部」の奨学金

ジトーミル市の大学や、他の州にある医科大学に進学した学生たちのために、奨学金基金を設立しようという「切尔ノブイリ救援・中部」の決定に対して、「切尔ノブイリの人質たち」基金の運営委員会は、当初あまり積極的ではなく、その理由をいろいろと挙げました。しかし、いつものように、「救援・中部」側はやんわりと基金設立の必要性を訴えました。そして私たちは、日本側が一度決定すれば、「強い意思を持って実行する」ことを、すでに知っていたのです。決めたからには、そうなるということです。その後、私たちの意見や提案が受け入れられないわけではありませんが、基本線はそのまま残るわけです。

発想自体は、ごく単純なものに見えます。汚染地域出身だったり、両親が事故処理作業者や切尔ノブイリ障害者だったりする学生がいて、成績優秀であれば、大学側の推薦によって奨学生に選ばれ、2年生から最終学年まで奨学金の支給を受けます。奨学生になれるのは、ジトーミル国立大学、農業・生態学大学、基礎医学短大、そしてポルタヴァ、ヴィンニツツア、キエフの医科大の学生です。しかし……。

この「しかし」には、多くのニュアンスが含まれています。第一に、推薦された奨学生候補者の、身元調査をしなければなりません。第二に、新しく奨学生として選ばれた一人一人の学生を、さらによく知らなければなりません。第三に、奨学生の運命に対して責任を持ち(なんといっても、4年間にわたって奨学金を払うのですから)、その不幸や喜び、学生自身だけでなくその家族の問題をも、知らなければなりません。言い換えれば、奨

学生たちは「人質たち」基金と「救援・中部」の子どもたちになるのです。

奨学生の数は多く、44名です。最初から、自分の義務は月に20ドルの奨学金をもらうだけだと思っていて、いつもありがとうございますと言ふとは限らない学生もいます。奨学金が、ただ単に降ってわいたのではなく、日本の善良な方々の意思と希望によって与えられているのだと理解している者もいます。それを理解して、奨学金支給の事務を行っている「人質たち」基金に、感謝する人もいます。20ドルというのは、106グリヴナほどですが、それほど多額のお金というわけではありません。しかし、学生にとっては大きな支えになります。栄養のある食事をとり、必要な本を買うことができますし、両親の住む村に帰省する回数も増えます。それに、ポケットにお金があれば、自立していると感じることができます。つまり、奨学金の支給は、ただ物質的な支援になるだけではなく、精神的な支えにもなります。そして、私には、後者の方がより重要ではないかとさえ思えるのです。

すでに学業を終え、働いている元奨学生たちのほとんどは、「人質たち」基金や「救援・中部」との関係を保っています。レーシャ・テレシュクは、元の教育大学、現在のジトーミル国立大学を卒業し、結婚してキエフに住んでいます。彼女の両親は、強制移住地域に隣接した、ナロジチ地区のモトゥイキ村に住んでいます。妹も国立大学で勉強しています。レーシャは私たちに手紙を書きまし、妹は私たちの事務所にやってきて、自分の生活のこと、レーシャや両親のこと話をします。

エレーナ・クリヴォイは、奨学生のまとめ役をしていました。昨年彼女が国立大学を卒業した後、私たちは彼女が大学の研究室に助手として残れるよう斡旋し

ました。エレーナは体が弱く、私たちは今も彼女を支援しています。最近、彼女の母が乳がんにかかった際にも、支援をしました。医学短大の奨学生であるイーゴリ・ヴラソヴェツが2ヶ月入院していた時には、必要な医薬品を買ってやりました。

私たちは、ルギン地区ボウスヌイ村出身のヴィンニツツア医科大生ネーリヤ・アタマンチュクや、オレフスク出身でポルタヴァ医学アカデミーの学生フェリクス・クリュニチコにも、いつも配慮をしています。「切尔ノブイリ救援・中部」を通じて、フェリクスの小さな娘がプレゼントをもらっていますし、フェリクスの父(切尔ノブイリ原発事故の事故処理作業者)の脳卒中後の治療費を、私たちは支援してきました。

奨学金基金には、政治的な意味もあります。日本からの支援があるので、ウクライナの若者は日本を尊敬するようになり、また多くの人たちが慈善活動に関心を持ち、私たちの呼びかけに応えてくれるようになります。

残念ながら、数年後には奨学金基金が尽きてしまいます。そしてすでに現在、私たちは「救援・中部」とともに、その存続について(どのようにして支援を長引かせるかについて)考えています。私たちは、すべての人に支援をするのが不可能であることをわきまえていますが、それでもやはり、少しでも多くの人を助けようとしなければなりません。

「切尔ノブイリの人質たち」基金代表  
グラディーミル・キリチャンスキイ

### カタログハウス「切尔ノブイリ母子支援基金」助成金が形となって！

今年1月、①ウクライナ・ジトーミル州内の医療施設の医療機器メンテナンス費用 ②高度医療技術専門家養成プロジェクト費用 ③専門家2名を派遣する費用 の総額1,400,460円の助成金をカタログハウス「切尔ノブイリ母子支援基金」からいただきました。

これらの助成金で入手した医療機器の修理部品や消耗品を携え、臨床工学技士の北野達也さんと江成美絵さんが、2月ウクライナ入りしました。彼らは「ジトーミル州立小児病院」「ジトーミル市立小児病院」で、リサイクル医療機器の点検・部品交換・修理・消耗品提供を行い、また現場の医師へ取り扱い説明・運用指導等を行いました。2年前寄贈した、リサイクル医療機器の麻酔器を使用して、450名の子ども達の手術ができたということや、生命維持装置の人工呼吸器導入により、救命率が向上しているなどの報告もありました。

派遣事業のもう一つの柱は現地で高度医療専門職を養成することです。既に、元・州立小児病院准医師のアンドレイさんや、市立小児病院のエンジニアのヤンさんとセルゲイさんの指導は、継続して行なっていますが、今回は国立ジトーミル技術工科大学と州立ジトーミル短期大学の学生達を対象とし、4日間の集中講義も実施しました。内容は「医療安全管理学」を含む、「生体機能代行装置学」「日本の医療制度」及び「日本の臨床工学士について」で、多くの学生達が受講しました。

高度医療専門職養成によって、患児に「安全で高度な医療を、安定して提供することができる」ようになればと考えています。

(山盛)



〈メンテナンスに取り組む江成さん〉

## 特集・評価 「移住者村の診療所における医療機器等の配備事業」プロジェクトの効果と課題

### ＜立案から、実施、評価へ＞

2004年に実施、完了したこのプロジェクトは、「救援・中部」の合宿（2002年夏）での議論からスタートしました。その後これは、運営委員会・「ホステージ基金」との協議、プロジェクトとして実施の決定、「ホステージ基金」と連携してのアンケート調査、日本大使館と「ホステージ基金」による実地視察、外務省「草の根無償」資金への申請、現地での機器の選定と購入、機器等の配備、導入機器稼動後のアンケートという流れで進行しました。2005年2月に、プロジェクト「終了時評価」として、専門家を交えた評価チームを結成し、初めての評価事業を行いました。

立案から実施までには、事前のアンケート調査とその分析によって、また同時に現地での27ヶ所の診療所等の実情視察が重ねられていることから、現地のニーズ、必要な機器をより的確に把握し、機器配備ができるといえると思います。

実施においては、現地機器業者の入・落札に関して説明不足等があり、関係者に不満を残していました。業者による設置がなされなかつことなどの問題もありましたが、おおむね良好に実施されていました。

### ＜プロジェクトの効果と影響＞

村の診療所では、今までほとんど機器らしいものがなく、被災者はじめ村の人びとは、遠い地区病院や地域病院へ行かねばならず、または治療をあきらめて我慢していたのが、近くで診察・治療が受けられるようになり、どこでも受診者が増えていました。医師たちからは今回の機器等の配備によって、心筋梗塞や糖尿病などの病気の早期発見・早期治療ができるようになったと報告されており、プロジェクトの効果が上がっています。村の人びとからは喜びと感謝の言葉が述べられ、住民の満足度は高いものでした。今回の診療所等への機器配備は、現在ウクライナで進められている「家庭医」制度にマッチした、時機を得た支援だったといえます。

また、機器のメンテナンス費用は自力で確保する、診療所の建物の改修や暖房工事を解決するために努力するなど、このプロジェクト実施による「現地の村行政、医療関係者への波及効果」は大きいものと予想されます。

### ＜「評価報告書」完成＞

今回の評価事業について議論を戦わせながら、報告書「被災者の居住する移住者村の診療所における医療機器等の整備事業」をまとめました。このポレーシュ紙面では、評価の全容をお伝えできませんので、詳しくは「評価報告書」をお読みください。ぜひ、皆様のご意見・ご感想をお寄せください。（「評価報告書」については、事務所にお問い合わせください）。

（評価チーム 戸村）



＜診療所で聞き取り調査をする評価チーム＞

## 「救援・中部」への提言

(特活) 名古屋 NGO センター理事

日本福祉大学福祉経営学部助教授 野崎泰志

### 1. 事業評価を NGO 自身が行う意義

#### —組織のエンパワーメント

ODA の事業評価と違い、NGO の場合、事業そのものに「思い」が含まれています。



〈セレミリヤ診療所で調査を行う(中央が野崎さん)〉

それは、個々人の動機、会のミッション、長い活動期間にあった様々なできごと、泣いたこと怒ったこと、出会いと別れ、それらを裏も表もすべて抱えながら、なおかつ現在も続けていこうとしている意思。ただ、こうした「思い」は、時としてもつれているものです。それらをほぐして、「筋(もやい)直し」をすることも NGO にとって大事なことで、それが事業評価という一つの機会に、組織の自己点検、自己評価として裏で実質的に成されないようであれば、いくら立派な評価報告書ができるても、私はさほど意味はないと思っています。

その意味で、今回の事業評価は、会の「筋(もやい)直し」として、一人一人が今までのことを振り返り、それをまたつなぎ合わせ、今後の糧としていこうと、新たな会の文化が芽生えて来ているように思えますし、そのように会全体に伝わって欲しいと思います。

### 2. ミッションの再構築

一つの事業を評価する過程で、多くの課題が浮かび上がってきました。現地の人々との連携の在り方、「自立」支援の今後、国内広報の方向性などなど。いずれも簡単なことではないし、ミッションの再検討から始めざるを得ないでしょう。ミッションは、それをどう実現していくかという方法にまで煮詰めないと、文字通り絵に描いた餅になります。「救援・中部」の弱点の一つは、こうした戦略の選択についての議論が浅く、単純化して言えば「届け！」という戦略しかないようにも見えます。また「自立」支援と言っても、私たちも「自立」しているかどうか疑わしいものです。双方の持続的発展や、共に歩むという関係作りの方が、現実的ではないでしょうか。

### 3. 市民的自由の原則から見た戦略の幅

NGO の成り立ちの基礎に、市民的自由の原則があると思います。それは、様々な権力の暴走を停めるために、多様性を認め合った上で実践的に共同の選択をしていく、という水平的連帯の原則でしょう。「救援・中部」の場合、よくあるような「少数メンバーによる独裁的運営で柔軟さを失った NGO」と違って、「メンバーの多様性を十二分に尊重するあまり、共同の選択のための煮詰め合いや歩み寄りを避けて来た」傾向があります。それが、戦略の選択肢を狭くしているという結果を招いているのではないかでしょうか。最大公約数的な方法しか選択できず、ニーズに応じた実践的判断の積み上げで、鍛えられることが少なかったかと思えます。各メンバーの思いや戦略の違いはそのままで、その一部でしか組織戦略が実施されていないので、個人の思いや戦略の小さな違いが時として会を揺さぶる大きな激震を呼びます。

### 4. プログラム評価の勧め

今回は一つのプロジェクト(事業)の評価でした。ミッションの再検討に入るとすれば、今までの諸事業を総合的に評価し直すことが必要になります。事業と事業の関連、現地の他の団体の事業との関係や政策環境との整合性などを勘案して、今までの活動全体を振り返ること。そうした、自らの組織改善と新たな展望のための時系列的プログラム評価こそ、NGO 独自の評価分野です。今回の評価事業をやりおおせた今、この会はそれらを自力でやることができる力を身に付けています。是非、時間かけてでも、そういう方向で進んでいかれることを期待しています。

## ウクライナ講座

### 報告

2005年度第1回  
目のウクライナ講座  
が、4月16日に開催されました。

今回のウクライナ講座は、「2月訪問団の現地視察」と「19年目の切尔ノブイ

リ 放射能汚染の現状」に関する報告会でした。

2月訪問は、草の根無償支援「移住者村診療所の医療機器配備」プロジェクトの評価調査の報告です。2004年10月に機器の配備が完了して、11月には日本大使館による中間評価も行われました。各診療所のアンケート結果(グラフ参照)を見ると、機器配備後は、診療所を利用する住民が、すべての村で増加したことがわかります。草の根無償支援事業によって、日本の援助に頼るだけでなく、自分達で何とか努力するという姿勢も出てきました。河田昌東さんからは、「19年目になる切尔ノブイリの放射能汚染は、今もなお延々と続いている。特に、食べ物による体内被曝が非常に多い。」等の報告がありました。次回のウクライナ講座は…いよいよスタディ・ツアの発進。只今募集中の企画スタッフを交えたツア企画発表。(3ページ参照)みんなで「スタ・ツア」を盛り上げましょう。ご参加お待ちしております。(大谷)

■日 時 2005年6月18日(土) 午後1時30分~4時

■場 所 名古屋市教育館(地下鉄栄駅下車 2番・3番・10B番出口すぐ)

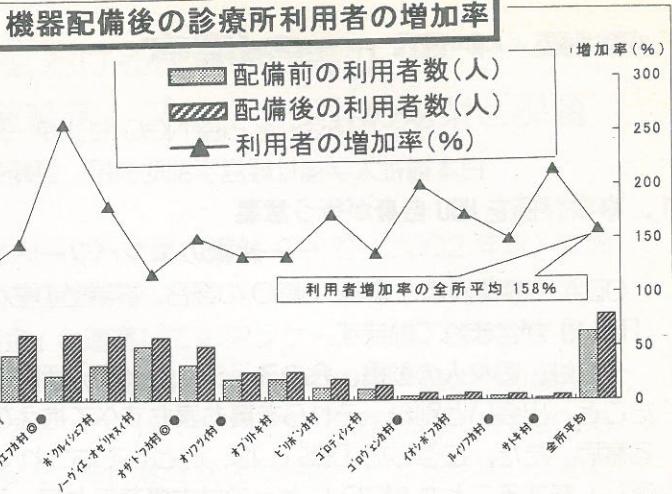
## 2005年度 総会&切尔救デーのお知らせ

毎年、集いの場となっている切尔救デーの季節がやってまいりました。今年の催し物は、「評価報告」。昨年実施した「移住者村診療所の整備事業」が、その後どのような効果をあらわしたかを、今年2月の視察時に、診療所スタッフ・行政・住民から綿密な聞き取り調査を行った、その結果をご報告するものです。

今までの「救援・中部」の活動を総括するという意義深いものです。ぜひお越し下さい。

■日 時 2005年6月11日(土)  
午後1時30分~4時30分

■場 所 愛知県中小企業センター  
第一会議室  
(名古屋駅より徒歩3分)



### プログラム

#### 第1部 「総会」

2004年度の事業および決算報告

2005年度の事業計画および予算について

#### 第2部 「移住者村診療所整備事業の評価報告」

<パネルディスカッション形式>

-名古屋NGOセンター後援-

#### 第3部 「茶話会」

NPO法人チェルノブイリ救援・中部 2004年度収支報告書

(2004·4·1~2005·3·31)

収入の部		支出の部	
項目	金額(円)	項目	金額(円)
救援寄付金	4,448,691	事業費	11,424,953
個人(496件) 3,777,191		医療機関支援事業費	3,687,715
団体(13件) 671,500		医療機器メンテナンス事業	1,337,715
運営費関連寄付金	566,000	医薬品提供事業	2,350,000
個人(72件) 555,000		保健事業費	1,200,000
団体(2件) 11,000		粉ミルク提供事業	1,200,000
外務省補助金	666,996	被災者団体等支援事業	1,100,000
地方公共団体交付金	0	特別事業費	679,047
民間助成金	7,080,460	市立小児病院コンピュータ支援	113,362
物品売上等	233,455	評価事業	565,685
預金利子等	435	奨学生事業費	1,300,000
現金過不足	0	派遣費	1,500,578
		業務委託費	449,915
		駐在員費	249,890
		輸送費	124,410
		文通・クリスマスカード事業費	48,070
		海外監査費	0
		機関紙発行費用	1,003,835
		国内監査費	66,500
		イベント参加費	1,000
		キャンペーン活動費	13,993
		管理費	2,704,466
		役員報酬	660,000
		人件費	737,300
		通信・荷送費	208,673
		印刷製本費	15,540
		旅費交通費	304,180
		会議費	9,552
		消耗什器備品費	24,316
		消耗品費	23,541
		修繕費	35,904
		事務所費	550,491
		支払手数料	71,259
		為替差損・両替手数料	3,710
		諸謝金	8,000
		団体会費	30,000
		雑費	22,000
		使途不明金	2,289
当期収入合計	12,996,037	当期支出合計	14,131,708
前期繰越	12,885,964	当期収支差額	-1,135,671
収入総額	25,882,001	次期繰越収支差額	11,750,293
		支出総額	25,882,001

今回の決算では、4月以降の支払いになってしまったメンテナンス事業費や、また4月以降の受け取りになった外務省補助金などがあり、前払いや未収金の多い会計となりました。（鈴村）

上記期間の収支報告書を監査した結果、異常なく正当に処理されていることを証明します。

2005年5月24日 監查人

### 年度末現預金残高と次期繰越収支差額の突き合わせ

年度末現預金残高 + 立替金等 — 未払い金 = 次期繰越収支差額  
 12,094,807円 + 721,659円 — 1,066,173円 = 11,750,293円

### [立替金等内訳]

### 野崎さんへの旅費立替

### 印刷製本費前払い金

#### 竹内さんへの駐在員費前払い金

### 外務省補助金未収金

478, 486円

### [未払い金内訳]

北野プロ派遣費

#### 北野プロメンテナンス事業費

国内監査費

176,959円

822.716円

66.501円

1.066.173円

放射能の危険性は、遺伝子を傷つけることがある。 Chernobyl の放射能は、人や動植物の遺伝子を破壊し、さまざまな病気や変異をもたらしている。放射能による突然変異の 90% 以上は、生物にとって有害である。ところが、現在人間は、発達した遺伝子操作技術によって、自ら遺伝子を切り貼りしている。いわゆる遺伝子組換え作物は、その作品である。遺伝子組換え食品は、ヨーロッパでは「フランケンシュタイン食品」あるいは「フランク・フード」とも呼ばれる。「異種生物の遺伝子を切り貼りした新たな生物」というわけである。この新型生物が、今、日本各地の港から侵入し、静かに内陸部に広がり始めている。

### 除草剤で死なない ナタネや大豆

10 年ほど前からアメリカで始まった、遺伝子組換え作物の栽培は、今爆発的に増加し、アメリカ産大豆の 80% は除草剤で死なない「除草剤耐性大豆」である。除草剤を散布すれば、雑草だけが枯れて大豆は生き残る。こうした性質は、アメリカやカナダ等における大規模栽培での省力化を目指したものである。カナダから年間 160 万 t 輸入されているナタネの約 30% は除草剤耐性である。この他、殺虫遺伝子を組み込んで、害虫が葉を食べれば死んでしまう「害虫抵抗性」トウモロコシも栽培され、日本にも輸入されている。これらの多くは食用油等となり、その油粕は家畜の飼料になる。日本では、2001 年から遺伝子組換え食品には表示義務が課せられたが、食用油や醤油などの加工品は、100% 組換え作物が使われていても、表示しなくて良いことになっている。

### 遺伝子組換えナタネが勝手に繁殖

食用に輸入される、大豆やナタネ・トウモロコシは、それ自身生きている種子である。畑に播けば、発芽し生育するが、それは開発業者の特許でやってはいけないことになっている。しかし、輸入され港に陸揚げされる際に、ベルトコンベアや輸送用のトラックからこぼれ落ちたものは、勝手に芽を出し発育してしまう。我々の調査では、茨城県鹿島港や千葉港・横浜港・静岡県清水港・名古屋港・三重県四日市港・神戸港・博多港では、こぼれ落ちた遺伝子組換えナタネが発芽し、年中開花結実している。これら遺伝子組換えナタネは、内陸部の製油工場に運ばれる途中、トラックから

こぼれ落ち、道路の中央分離帯や沿道の土手などに自生している。四日市港から約 50km 南の嬉野町の製油工場に至る道路沿いには、すでに人間の手を離れた遺伝子組換えナタネが繁殖し、日本の自然に溶け込もうとしている。除草剤耐性といっても、見た目にはそれとわからないので、人は単に「美しい菜の花が咲いている」と思うだけであろう。ナタネは、他家受粉性植物なので、周辺に国産のナタネ畠があれば受粉し、組換え遺伝子が入り込んでしまう。白菜やキャベツ・カラシナ・カブなども、実はナタネの仲間であり、受粉の危険性がある。そのようなわけで、遺伝子組換えナタネの自生は、今後国内農業にも大きな問題を起こす可能性がある。また、生物多様性条約による国内野生生物保護の観点からも、問題となる。

現在、日本各地の河川敷には、沢山のカラシナが自生し、春にはお花畠のように美しい。また、現在各地で町おこしのために行われている「ナタネ街道」や「ナタネ油ジーゼル」などの菜の花畠に、組換えナタネの花粉が飛んでくるかもしれない。

### 組換え遺伝子のモザイク構造

組換え遺伝子は、なぜ問題なのだろうか。それは種の壁を人間の手で取り払い、進化の過程でできた生物固有の遺伝子構成を、破壊するからである。例えば、除草剤耐性ナタネには、土壤細菌の遺伝子や、ペんぺん草・えんどう豆・ゴマノハグサの病原ウイルスの遺伝子などが入っている。これらが自然界に伝播すれば、長期的には、生態系や生物の進化にまで、影響を与えるかもしれない。 (河田)

## 竹内さんのウクライナ便り

今年のウクライナは春が遅く、4月下旬に最後の冷え込みが来て積雪までありました。5月下旬になって急に暑さが到来。30℃を超える気温で、人々はいっせいに軽装になり、おりしもキエフで開かれたヨーロッパ歌合戦「ユーロヴィジョン」で、都心はにぎわいました。今年で50年目になるというこの催しは、ヨーロッパ各国がそれを代表する歌手を派遣してその技を競うというもので、昨年ウクライナ代表の歌手(ルスラーナ・ルイジチコ)が優勝したため、今年はキエフで開催されることになったわけです。もっとも、このコンクールに出場するのは二流の歌手であり、過去の優勝者で名が残っているのはABBAとセリーヌ・ディオン(カナダ出身だが、スイス選手として出場)くらいのものだという説もあります。今年ウクライナを代表したのは、「オレンジ革命」の真っ盛りに「僕らは多いぞ、打ち負かされないぞ」の歌詞で一世を風靡(?)したバンド「グリーンジョリイ」で、彼らが選ばれたことに政治的匂いをかぎつけたポップス・ファンの抗議行動もありました。



〈オレンジ革命のカレンダー〉

結局、彼らは十何位かの成績だったそうです。

一方、肉やガソリンの価格が高騰してそれに政府が介入、特にロシアの石油メジャーとティモシェンコ首相の交渉で、

ガソリン価格が国家により統制されるという措置は、さまざまな反響を呼び、「共産主義時代の再来」という西側マスメディアの批判を招きました。この問題をめぐる、首相(価格統制派)と大統領(市場経済重視派)の反目も取り沙汰されています。また、クチマ前大統領時代の国営企業民営化に際して、談合の疑いが濃い企業の「再民営化」(入札のやり直し)に関し、大統領は29社のリストを示唆。それがロシアの新聞ですっぱ抜かれたのに対し、首相は29社への限定を否定するなど、政権内部でのきしみが目立っています。

さらに、ティモシェンコ氏は、2030年までに11の原子炉を増設するというプランを発表。2011年にはいくつかの原子炉が操業期限を超えるというのもその理由です。「2030年までに、国内で核燃料サイクルの技術的・経済的基礎を築く」という課題も提出されており、その理由として、世界的なウラン資源の減少が、核燃料の価格高騰を招くことへの懸念、ウクライナでウランとジルコニウムが産出されることがあげられています。現在、核燃料の製造をロシアに依存していることも、明言されてはいないものの、大きな理由の一つと思われます。しかし、環境問題・自然保護・原子炉保安省大臣トリッティン氏は、「既存の原発の近代化の資金も出せない国が、どうやって新規に原子炉を建設できるのか」と発言。

もともとエネルギー業界の出身であるティモシェンコ首相の強気の政策が、どれほど現実的なものか、今後の政界の動きもからんで、正確な判断はまだ難しいというべきでしょう。[なお、5月9日の軍事パレードは、結局行われませんでした。]

(5月25日)

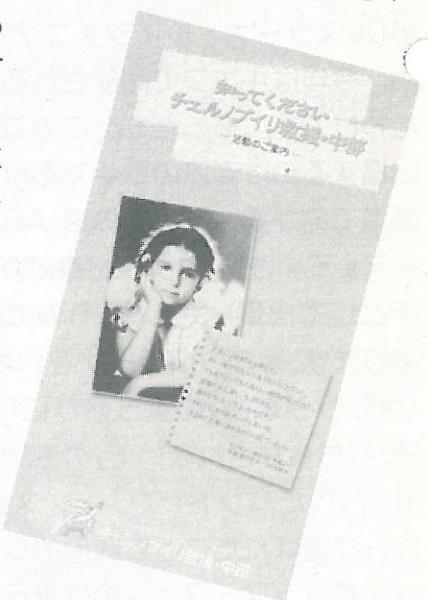
## 事務局便り

4月～5月の「救援・中部」事務局は(特に、山盛さんが事情によって休んでいた4月は)、大変でした。本来なら、この時期はプロジェクトの準備などがない分、事務局の仕事はあまり忙しくないのですが、大切な決算の仕事をかかえて、会計の僕としては、個人的に大変でした。皆様からの貴重な寄付を預かる仕事ですから、正確で間違いない会計を目指さなくてはなりません。4月中旬に、河田さんとふたりで必死になって集計し、会計監査を終えたのですが(なんせ前の会計から引き継いだばかりで大変な作業でした)、後になって、以前までのやりかたと違っていて、不備があるという指摘があり、5月は大慌てでその修正処理を行いました。今後も、会計処理の問題は、「救援・中部」全体で考えいかなければならぬ問題です。しかし、事業が終わってみれば、評価プロジェクトしかり、北野さんによる中古医療機器メンテナンス事業しかり、ウクライナ現地にとって有益な事業ができたことを自負しています。(とはいっても、入ったばかりの僕は、事務所で会計を行いながら見守っていましただけですが…。)これからも、「救援・中部」の仕事にどんどん関わっていきますので、応援お願いします!(鈴村)

## 「知ってください」リニューアル版完成!!

5年ぶり、3回目の改訂となった「知ってください」。写真などを一新し、現在の活動をお伝えするのに、より効果を発揮するリーフレットに、バージョンアップしています。

ご購読もしくは、各地での配布ご希望の方は、事務局までご連絡ください。お送りいたします。



## 編集後記

☆「生きて苦しみに耐えることは、死ぬことよりも勇氣が必要」って、本当にそうだなあと感銘した。でも「見守ってくれる人がいる」という安心感は、その勇気を支えてくれる。離れていてもきっと伝わる。(美)

☆かつて「産みの苦しみ」は3度味わった。今回は報告書まとめに「胃の苦しみ」の連続。まだまだ、私の課題は続く。(京)

☆ボールペンは買う物ではなく貰う物というポリシー。だけど4色ボールペンが喉から手が出るほど欲しくなってはや数ヵ月。執念でデパートの抽選で当てたぞ!(佳)

☆4月より、いわき市に転勤。浜岡や福井から逃げ出せると喜んだのもつかのま、福島のふところに飛び込んでしまった。日本は狭い。(泣)

原油の値上がりで、工場はますますコジエネが有利に。ところが、電力会社から「電源交付金の恩恵がなくなりますよ」と耳打ちされ、断念!?(J)

〒456-0022 名古屋市熱田区波寄町 20-14  
印刷 「エープリント」  
TEL・FAX (052) 871-9473

